

分別と戯論^{けろん}

本学教授 兵藤 一夫

ただ今ご紹介にあずかりました兵藤と申します。まずは東北震災のことですが、発生から二ヶ月以上たちながら国を挙げてまだまだ十分な私たちで復旧や復興に向けて方向づけられていないところがあり、被災された方々は多くの苦しみを感じておられると思います。私たちとしてはもちろん復旧・復興に向けて一緒にできる限りの活動をしながらも、一方で、被災に伴う直接的な大きな苦しみは最終的にはやはり各自で背負っていかざるを得ないということもつくづく思います。そういう中で、仏教はやはり、生きていく上で起こってくるさまざま多くの苦しみを自分自身で背負いながら、それにどう対処していくかということを学んでいくものだと思います。今日はそういう視点で、私たちは「苦しみ」にどう向かっていけばいいのか、特に仏教ではそれをどんなふうに捉えようとしているのかを、私なりにお話してみたいと思います。

そこで講題としては、「分別と戯論」というものにさせていただきました。「分別」という語はよく耳にしますが、

「戯論」という語はそれほど聞き慣れたものではないと思います。「戯論」はその字義通りに「戯れの論」ということで、これについては後ほどその原語や語義を含めて詳しく説明しますが、適切な漢訳語だと思っています。後でも触れることとなりますが、釈尊あるいは仏陀の説かれた正しい教え、いろいろな経典等に説かれている教え、それらも仏教では最終的には「戯論」というふうに言ってしまうのです。そういうふうなことも踏まえて、私たちがこの「ことば」との関わりの中で作り出している心のあり方、そしてそこから苦しみが生まれてくるのだという仏教の基本的な立場のところが今日はお話しできたらと思っております。

一 仏教の目ざすもの

ところで、仏教に関係することを考えたり話したりするときは、仏教の基本的な立場というものをいつもどこかで踏まえておく必要があると思います。そこで本日も、仏教の基本的な立場というものをもう一度簡単に見ておいた上で、「分別と戯論」ということをお話しすることにします。

まず、仏教の基本的な立場と言いますと、私たちが生きることにおいて生じてくるさまざまな「苦しみ」から解放されていくこと、それは仏教的な表現をすれば生・老・病・死と言われるような輪廻の「苦しみ」から解放することであると言えると思います。それは有名な「四門出遊の伝説」に示されるように、釈尊が老・病・死という「苦しみ」を順に自覚した後、最後に沙門に出会うことにより、自らも出家をし、苦行等のさまざまな修行した後、覚りを得ることでその「苦しみ」から解放されたという、釈尊自身の課題であったわけです。このように、仏教の基本的な立場は、「苦しみ」からの解放・解脱ということになるわけですが、その解放のための方法というものは、仏教としての大きな特徴があると思います。それは、「苦しみ」から完全に解放されるためには「苦しみ」の根本的

な原因というものをきちんと見つけ出して、その原因を断つこと、という非常に論理的な方法であつて、医者が病気を治す方法によく喩えられます。医者は病気を治すために、まずは診察や検査をしてその病気の原因を見つけて出します。そして原因を見つけた後、薬や手術やいろいろな手立てを使ってその原因を取り除きます。そうすれば病気は治ります。それと同じように、私たちの「苦しみ」も、その根本原因を見つけて出して、それを断ずれば「苦しみ」は自ずと生じなくなると、仏教では考えています。

そうすると、まずは「苦しみ」の根本的な原因を見つけて出すことが重要となります。仏教では、その原因の追求はさまざまに表現されますが、その代表的な例を「十二支縁起」の中に見ることができます。十二支縁起は仏教の代表的な教説の一つですが、これは私たちの輪廻における「苦しみ」の代表である「老死」を出発点にして、その原因を矢印(↓)の方向に追求していったものであると捉えることができます。

老死↓生↓生存(中の業)(有) ↓取著(取) ↓欲望(渴愛) /
 ↓感受(受) ↓接触(触) ↓六感官(六処) ↓名称と物質(名色) ↓認識(識) /
 (↓習慣力(行) ↓無知(無明)) //

ここでは詳しくは説明しませんが、原因を追求していく中で「欲望」、仏教では「愛(渴愛)」と言いますが、それが原因だということが見つかります。ただ、仏教はこれが根本原因であるとは考えませんでした。もし仏教も欲望(渴愛)が根本原因であると捉えて欲望を断てばよいということで終わっていたら、仏教は平凡な宗教の一つに止まったままで、仏教の持つ「智慧」という特質も生じなかったように思いますし、欲望はなぜ起こってくるのだろうかというようなこともはつきりしないまま、何か苦行をして欲望を抑えるということになってしまったかも知れません。そうしますと本当の解決にはならないということになります。

そこで、仏教では、欲望はなぜ起こってくるのかとさらにその原因を追求していきます。そして次に見つけ出した原因が「認識」、仏教では「識」と言われるものです。この識は、視覚（眼識）・聴覚（耳識）・嗅覚（鼻識）・味覚（舌識）・触覚（身識）の五つの知覚と思考（意識）との六つのことです。これらの識が苦しみの原因であるということは、私たちが日常的に行なっている、見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触る、考えることそのものが「苦しみ」の原因であるということになります。これは非常に大きなことだと思えます。私たちの日々の心のあり方、ものの捉え方、認識の仕方、しかもそのあり方の一番根底にある、見る・聞く等という生きていく上での当たり前のことそのものの中に、「苦しみ」の原因があると、仏教は言っていることになります。それが、十番目の「認識」です。

そこで、もし「苦しみ」の原因というものが私たちの日々の「認識の仕方」であるとすれば、ではなぜそういうふうになっているのだろうということ考えた時に、これは私たちが生まれながらに、あるいは生まれた後に経験の中で獲得した「習慣力（行）」、仏教的に言えば、輪廻転生（生まれ変わり死に変わり）する中で染みついていたもの（習気）、が働いて、今のような「認識の仕方」、それは「ことば」を使って認識するあり方ですが、になってしまっているからであると考えられます。ではそういう「習慣力」というものはなぜ起こってくるのかと言うと、それは真理を知らない「無知（無明）」であるからであるとされます。したがって、是の最後の「習慣力」と「無知」は、現状のような私たちの認識の仕方がどうして生ずるのかを追求したのですが、同時にそれは、どうすればそのようなならないかという対処の仕方を念頭に置いたものになっています。このような「苦しみ」の原因に対する視点が、仏教の特色である「智慧」ということにもつながっていきます。

二 苦しみの根本原因

以上のように、十二支縁起による「苦しみ」の原因の追求では、「無知(無明)」が根本原因とされますが、私たちが原因として直接目を向けていくべきものは、やはり、私たちの日々の「認識の仕方」、見たり聞いたりするあり方そのものということになると思います。そのことを龍樹は私たちに的確に示してくれています。龍樹は、日本では「八宗の祖」と言われますように、釈尊の教えを捉え直して、その教えの核心を私たち仏教を学ぶ者たちに明確に示してくれる、非常に重要な人です。龍樹の主著である『中論』には、仏教の核心が次のように述べられています。

業と煩惱とが滅することから解脱がある。「その」業と煩惱とは分別より(生ずる)。それら(分別)は戯論より(生じ)、しかるに戯論は空性において滅する。

まず、「業と煩惱が滅することから解脱がある」と言われます。これは先ほどの十二支縁起で言えば、老死からたどっていった取著や煩惱とそれに基づく業が「苦しみ」の原因とされ、それらが滅することから「苦しみ」の滅、すなわち解脱があるとされています。しかし、龍樹はさらにその業と煩惱の原因を探り、「その」業と煩惱とは分別より生ずる」と説きます。この「分別」は先ほどの十二支縁起の語では、「認識」、日々の認識の仕方であると言えると思います。次に龍樹は、「それら分別が戯論より生じる」と語り、「分別」の原因として「戯論」という語を持ち出します。本日はこの「分別と戯論」ということが話のテーマですが、これは先ほどからお話しています私たちの「苦しみ」を生み出す原因に当たります。龍樹はこういうかたちで、私たちがどこに目を向ければよいかを非常に明快に示してくれているわけです。そして最後に、「しかるに戯論は空性において滅する」と述べます。ここで「空性」ということは、仏教で言う「真理」というものと捉えてよいと思います。そうすると、この真理である「空性」を知るこ

とによって「戲論」が滅し、戲論が滅することで「分別」が滅し、そして分別が滅することで「業と煩惱」が滅し、そのことによって「苦しみ」が滅するので、「苦しみ」から解放されると言っていることになります。

三 龍樹の基本的立場

そこで、本日は龍樹によって非常に明確なかたちで示されたこれらのことばを直接手がかりにして、「苦しみ」の根本原因としての「分別と戲論」とはどんなことか、私なりに理解していることをお話ししてみたいと思います。ただその場合に、龍樹のことばの最後の所にてくる「空性」という語は、「分別」と「戲論」ということと表裏のもの、あるいはそれらと密接な関わりのある語でもありますので、仏教を学んでいる者にとつてはよく耳にする身近な語ですが、多くの皆さんにとつてはそれほど馴染みのある語ではないと思いますので、前もつてそのことに関したことを少しお話ししておきます。

龍樹は『中論』において、大まかに言えば、二つのことを説示しています。一つは、「縁起」ということに関係するものです。(すべてのものや現象は刹那ごと(瞬間ごと)に因・縁によって生じ滅するもの、すなわち縁起するものであるが、その場合、恒常不変な本性(自性)を前提にしては生じ滅すること等は成立しない。したがって、縁起するものはすべて「無自性」「空性」でなければならぬ)というものです。「縁起」という語は耳慣れたものではありませんが、その意味することは、これからお話しするように、普段考えているようなこととは少し異なります。仏教では、「恒常不変な本性」を「自性」と呼びますが、ものや現象にそのような自性があれば、生じることや滅すること、すなわち「縁起する」こと、は成立しないということがきちんとしたかたちで論じられています。ですから私たち自身の身心も含めてすべてのものや現象が因・縁によって生ずる(縁起する)ものであるとすれば、その場合は、必ず

恒常不変な本性があつてはいけないのです。したがつて、縁起するものはすべて自性が無いもの（無自性）となります。龍樹はこの「無自性」ということを「空性」とも呼んでいます。しかし、私たちは変わらない不変なものを自分の中や自分の周囲のものの中に見出し、自性があると思ひ、それを「ことば」を用いて表現しています。それが私たちの日常の認識の仕方、ものの捉え方であり、それは「分別」でもありません。でも、ものや現象が縁起することは自性というものを前提にしては成り立たないことは、龍樹が『中論』の別の箇所ではつきりと論じてくれています。このことにはこれ以上深く入ることはしませんが、龍樹にとつては、「縁起する」ということ（仏教的な別な表現では「無常である」とも言える）は、「無自性である」「空性である」ということと不可分であり、同じことの別な表現であることとなります。

もう一つのことばは「ことば」と関係するものですが、へものや現象に自性があることを前提にすると言語表現が成立しない」ということです。私たちはものや現象というものに自性や属性があると思ひ、それを「ことば」を使って表現しています。例えば、これは「花である」、「この花は赤い」などと「ことば」を使って表現しています。その場合に、「ことば」の対象として恒常不変な「自性」や「属性」というようなものを前提にしては言語表現が成立しない、「ことば」を使って表現することが破綻してしまうということです。このことも、『中論』の別のところできちんと論じられています。したがつて、言語表現はすべて、「無自性」で、縁起しているものや現象のある一面や関係を仮に「ことば」を使って表現するだけであるということになります。これを仏教では「仮説」^{けせつ}（仮にことばによって説くこと）と呼びます。この、「ことば」で表現することはすべて「仮説」にすぎないということは、「戲論」ということともつながっています。ここには、仏教が「ことば」の有する本質や限界等を冷徹に捉えた上での「ことば」に対する基本的な立場が見られます。これからその一端をお話していくこととなりますが、仏教では、「ことば」はあく

まで仮のものであり真実を表現することはできないばかりでなく、私たちを誤らせ執われを生み出すことと密接に関わったものである、しかし一方で、「ことば」によってしか仏教の目ざすものやその方法を伝えることはできないという、一見相矛盾する捉え方をしています。

仏教の「ことば」に対するスタンスがどれほど特異なものであるかは、他の宗教と比べてみれば明らかです。仏教は、キリスト教・イスラーム・ヒンドゥー教と並んで世界の四大宗教と言われることがありますが、その場合、他の三つの宗教と大きく異なることの一つに「ことば」に対する捉え方があります。他の宗教は、いわゆる「啓示宗教」と言われるもので、絶対的な神が実在し、その神が「ことば」によって真理を私たちに伝えてくれます。その時、神は預言者（言葉を預かる者）、それは神の「ことば」を聞いて私たちに伝えるメッセンジャーのような者ですが、を通して真理を伝えます。詳しくはお話しませんが、その預言者が私たちに神の「ことば」を伝えてくれるわけです。そして、その神の「ことば」は「真理のことば」であり、「ことば」そのものがまがうことのない絶対的な真理なのです。ところが仏教ではそうではありません。先にお話ししましたように仏陀の教えは「仮説」であり「戯論」なのです。仏教では、仏陀の説かれたことさえも「戯論」なのです。そこには「ことば」に対する根本的な立場の違いというものがありません。仏教にとって「ことば」は真理そのものを表現することはできず仮に表現するもの、戯れにしすぎません。ではなぜ仏陀は私たちに「ことば」によって教えを説いたのでしょうか。私たちは、最終的には「ことば」を超えた真理を直接自分でつかみ取る、自ら仏陀になること（成仏）が求められているのですが、そこに向かう手立て（方便）として仏陀は「ことば」による教えを私たちに説いてくれているのです。ですから教えというものは、私たちの苦しみの世界であるこちらの岸（此岸）から彼岸へ至るための筏のようなものとも言われます。それに乗って行くけれども、向こう岸の覺りの世界に至った時は、その世界は「ことば」では表現できない（不可言説）、

「ことば」を超えた世界に直接触れるのですから、「ことば」で説かれた教えである筏は不要になります。むしろそれに執われていけば向こう岸に降りられません。だから捨てなさいとまで言われます。このような「ことば」に対する仏教の立場は、これまで私たちが「ことば」に対して持っていた見方を根底から変えるほどの強いものがあります。そういう意味で、「ことば」や「ことば」で表現することを「仮説」や「戯論」と漢訳されていることは適切であるように思えます。

四 分別と戯論

龍樹は「分別は戯論より生ずる」と述べ「分別」と「戯論」を区別した上で両者の関係を述べていますが、別な所では二つの語をほぼ同義として用いてもおり、また、注釈者たちもそれほど明確に両語を区別していないので、ここでは「分別」と「戯論」は意味内容が重なる部分を持ちながらも、大まかには「戯論」というものから「分別」が生ずるということを念頭に置いて話をしていきます。

まず「戯論」とはどんなものかを考えてみます。少し専門的なことになりますが、「戯論」という語が経典や論書などでどのような意味で使われているかを見ておきます。「戯論」という語は、パーリ語で「パパンチャ (papancā)」、サンスクリット語で「プラパンチャ (prapañca)」と言います。どちらの場合もその語根(動詞としての語源)は明らかではありませんが、用例や註釈などを基に、「パパンチャ」は「障礙」「妄想」「拡張」「多様」などと、「プラパンチャ」は「多様な言語」「概念的に虚構すること」「言語的多元性」などと現代語訳されています。

そこで、最初に、初期の経典に見られるパーリ語の「パパンチャ」について考えてみます。初期の経典には、例えば、「私は存在する^レ、私はこれである^レ、私は物質を有する^レ」などと想うのがパパンチャであり、それは病いであ

る」などと説かれています。これによれば、あることがら（ここでは「私」ということ）を元に「ことば」によって想いを抜げていくことが「パパンチャ」であり、それは「病いである」とも言われています。また、「パパンチャの集まりが苦をもたらず」「パパンチャは修行者の越え行くべきもの」「般涅槃した仏陀はパパンチャを断じている」などとも言われます。ですから「パパンチャ」ということは、「ことば」を使って私たちが次々と考えを展開してゆく時のあり様、さらにはその展開の基盤になっているものを表しているように思われます。

ところで、この「パパンチャ」にはさらに一つおもしろい用例があります。最初期の仏教文献である『スッタニパータ』の中の、最も古い部分の一つと認められている「アッタカヴァッタガ」章の中に次のような文章があります。

「考える者が私である」[〃] というパパンチャと呼ばれるものの根をすべて破壊し、内にある渴愛は何であれ、それを除去することにいつも注意して学びなさい。

ここに「パパンチャ」という語が出てきますが、[〃]考える者が私である[〃] という「パパンチャ」と呼ばれるものの根と言われています。これは「パパンチャ」の根が考える主体である「私」であることを明確に指摘しています。「私」という想いが根底となってパパンチャが起[〃]り、それが渴愛を生み出すと言うのです。[〃]考える者が私である[〃] というこの表現から、皆さんもすぐにデカルトの[〃]我思う故に我あり[〃]を連想されると思います。デカルトの場合、考える主体である自我の实在の確信が発点で、そこからこの世界というものを再構築していきます。この考え方は西洋の近代思想の出発点でもあり、この立場は後の実存主義哲学などにも引き継がれて、西洋思想の中核の一つとして保持されています。ところが、仏教はそれこそがすべての渴愛や苦しみを生み出す根であり、それをなくさない限り私たちは「苦しみ」から解放されないと言うのです。ここには、仏教の根本的な立場がはっきりと見られると想います。デカルト（十七世紀前半）の場合、それまでキリスト教世界における神との関係の中の「私」ということから脱

却して、新たな近代的な「自我」の確立として十分な価値を持つてゐることは理解できませんが、仏教では、『スッタニパータ』『アッタカヴァツガ』という紀元前の經典の中で、[〃]考える主体である私[〃]こそが「苦しみ」の根であり、それを破壊すべきであると言つてゐるのです。これはやはり驚くべきことだと思ひます。考える主体である私を中心にして、私たちは「ことば」によつて「パパンチャ」を展開させていく時、それは限らない広がりを持つため、進歩や発展が実現したり将来約束されると錯覚してしまひますが、やはりそれはあくまでも「戯れ」であり、「戯論」にすぎないものなのです。このような見方、立場が仏教には最も初期からあつたのです。

次にサンスクリット語の「プラパンチャ」について見てみます。語義としては「拡張」「多用」などですが、言語に關したものですから「言語的拡張性」とでも訳すことができると思ひます。『中論』の注釈書によれば、「戯論」は「利得・損失・名譽・不名譽・賞賛・誹謗・樂・苦の世間的な八つのこと」がらに執着すること」「言語を本性とするもの」などと説明されてゐます。そして、「戯論」から分別が生ずる一連の流れについても「凡夫は対象を知覚すると、その対象は彼の戯論の網に捕えられて戯論が活動を始める。するとその対象に対して、その自性や属性などを構想・判断する「分別」が生じ、それに基づいて煩惱や行為(業)が起る」と説明されます。これによれば、私たち凡夫の心は、感官を通して対象が心に入つてくると、それを「戯論の網」で捕えるや、直ぐに「戯論」が活動を開始します。例えば、何かを眼で捉えるや、直ぐに心の中で「戯論」が活動を始め、[〃]何だろう？[〃] 花だ。どんな花か？ ツツジだ。どんな色か？ 赤だ。美しい、近寄つてみよう、……[〃]などと次々と「ことば」による「戯論」が拡張することを通して、[〃]これは赤いツツジである[〃]、[〃]これは美しい[〃]、[〃]近づいて手に取つてみよう[〃]などと分別が生じ、次いで意志や行為(業)が起こつてくることになります。したがつて、私たちの心は、外界の対象を感官を通して捉えること、あるいは、ふと何かが心に浮かぶことをきっかけにして、心の中にある「戯論」(あるいは、「戯論」のあり

方をする心と言ってもよい)が活動を始め、それが次々と連鎖しながら拡張していくことにより、気絶や熟睡などで意識が途絶えていない限り、絶えず分別を起こしていることになります。

それでは、どうしてこのような「戯論」が私たちの心の中に巣くっているのでしょうか。仏教では、それは無限の過去からの輪廻の中で心に染み込んだ習慣力として説明しますが、「ことば」自身が持つある種の力、魔力と言ってもいいようなものだと思います。人類は歴史上のある段階で「ことば」を獲得します。そして「ことば」を獲得することによって、よく言われますように、それまでの動物の状態から大きく変化したように思います。これを「人間になった」と表現したりもしますが、それまでの単に本能だけに基づくあり方から抜け出て、自他や生死などの区別を知る中でそれらを意味付けするようになっていきます。そして、そのことは新たに「自我」「私」というものを抱えていくことになるため、同時に新たな大きな「苦しみ」を抱えてしまうことにもなります。この新たな「苦しみ」への対応や解決方法がさまざまな宗教として考え出されたようにも思います。仏教もその一つですが、その視点・矛先は、人間が「ことば」によって新たに作り出し抱えることになった「苦しみ」の根本原因そのものである「自我」に向けられていることはとても重要なことです。

それでは、「ことば」によって人間になったけれども、「ことば」を捨てて元に戻ればいいのかと言えば、そんなことではありません。仏教は「ことば」を捨て去るのではなく、「ことば」によって作り出される「自我」などの誤った実在を捨て去り、「真実」は「ことば」を離れた形で了解されるということを示そうとしているのです。しかも、そのことは「ことば」による教えによってしか説示することはできません。そのような、ある意味では相反する部分も持ちながら、真実の智慧(覚り)を得るには「ことば」を離れることが求められています。

以上のことから、「戯論」とはどのようなものであるかを私なりに考えますと、次の三つにまとめることができる

ように思います。一つは、先ほどの『スッタニパータ』の例からもわかるように、「戯論」は自我意識を根底にした心に張られた「言語の網」のようなもので、眼識などの六識（五感と意識）の対象になったものを受け取る（捉える）ことで活動を始めるものです。

二つ目は、私たちはさまざまな状況において知覚の対象に出会うことによって、「ことば」の意味や相互関係が拡張変化していきます。それは自らの「戯論の網」が拡張変化していくことでもあります。言い方をかえれば、同じ語であつてもその人の経験によつて意味が変化したり、新たに付加されたりするようなことが起こります。例えば、「父」や「母」という語は、自らが父親になったり母親になったりした時、それまでに持っていた意味内容・イメージでは表現できないような経験をするにより、「父」や「母」という語の意味内容・イメージは大きく拡張変化することが見られます。

三つ目は、「戯論」とは、「ことば」が意識化されない、無意識の状態も含めての言語活動ということです。それに対して、「分別」は、自分は今何を考えているのかということがはつきり意識にのぼつており、「ことば」が意識化されたものです。「戯論」と「分別」の違いを考える時、意識化されているか否かを考慮することは有効な一つの視点でしょう。

さて、これらの点を総合すると、「戯論」とは、私たちの心の中に組み込まれている「言語のシステム」のようなもの、そこに外部から何か信号（対象としての刺激）が入ったら一気に活動を始め、活動を始めると容易に止まらない、しかも無意識の領域にも及んで活動するシステムのようなものであると考えることができそうです。しかも、このシステムには「自我」の実在がその根底に組み込まれており、自我に付随して、他者や他の事物の実在も組み込まれているので、そのシステムの活動によつて作り出されるのはまさに「分別」であることとなります。

五 分別の世界（ことばの世界）とあるがままの現実の世界の関係

最後に、「戯論」の活動によって作り出された「分別の世界」と「戯論」を離れた「あるがままの現実の世界」の関係、あるいは両者の違いについて簡単に述べておきます。これまでお話ししたことから、二つの世界は似て非なるものであることはある程度お分かりいただけたと思います。私たちの身心を含めてすべてのものや現象は、不変な本性を持たず縁起するもので、次々と生・滅を繰り返している（無常な）ものです。それが「あるがままの現実の世界」ですが、それを、私たちはそれぞれの心にある「戯論（言語のシステム）」を通して捉え直して、もとの現実界とは似て非なる「分別の世界（ことばの世界）」を作り出し、それを「日常の世界」として生きているのです。そして、その「分別の世界」は自我を根底にした「戯論」が活動する世界であり、「執われ」や「苦しみ」の渦巻く世界でもありません。

では、どうして「戯論（言語のシステム）」を通ずることによってそのように世界が変質してしまうのでしょうか？ それには「ことば」の特性が大きく影響しています。これまでお話ししたことと一部重なりますが、そのことをはっきりさせるために、「ことば」の特性とつなげて説明しておきます。

「ことば」というものは地域・共同体の約束（契約）事ですから、基本的にはいつでもどこでも同じで、「不変性」「固定性」という特性を有しています。例えば、目の前にある「花」を今ここでは「花」、別な時・別な場所では「鳥」などと勝手に呼び名を変えらるることになれば「ことば」としては成立しません。そして、もう一つの「ことば」の特性は、それが表示する意味内容が「共通性」「一般性」であるということです。例えば、「花」という語は同じ種類のものの「共通性」「一般性」に名前をつけるのであって、個々のものや現象に対して個別の名前をつけるとすれ

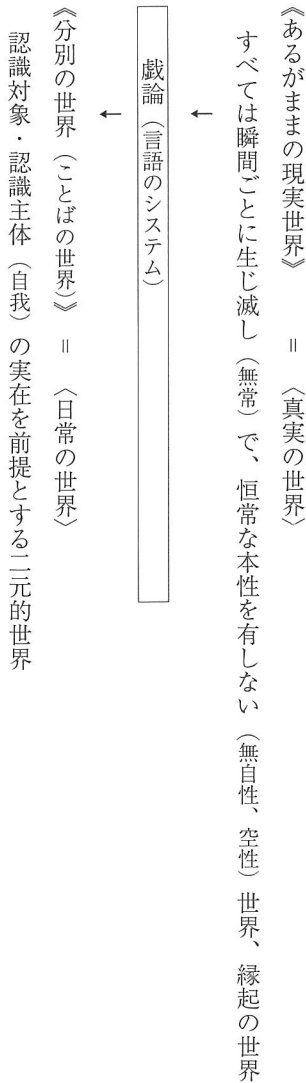
ば、「ことば」としての機能はほとんどなくなってしまうでしょう。したがって、「ことば」は基本的にはこの二つの特性を保持しながら、一方で先に述べました「拡張性」を持つているため、各人の経験によって「ことば」の意味内容や相互関係が変化・拡張していくと考えることができます。

このような「ことば」の特性に留意しながら、先に述べた「戯論」が活動し、それによって「分別」が起るという対象認識のプロセスをたどってみるとおもしろいことが見えてきます。例えば、タンポポを見る^oということを考えてみましょう。眼の前に見えているタンポポそのものは一瞬一瞬変化して無常で無自性なものなのですが、私がタンポポを見て、タンポポが眼を通して私の「戯論の網」に捉えられると、直ぐに私の「戯論の網」が活動し始めます。そうするとその捉えたものは「ことば」とつながられるので、ほどなく「タンポポ」という語とつながって捉えられます。そして「タンポポ」という語で捉えられてしまうと、「ことば」には先ほど言ったように「不変性」「固定性」という特性と「共通性」「一般性」という特性があるから、それらの特性が眼で捉えた「タンポポ」に付加されてしまいます。そうすると、眼で捉えた「タンポポ」自身はオリジナルなもの、すなわち無常であり、しかもこの世界に唯一のもの (only one) ですが、「タンポポ」という語と結びついた瞬間に、それは不変な、「タンポポ」という花一般(あるいはその花の一つ)という形に変質されて捉えられているのです。ですから、少し時間がたつてから再びそれを見ても、しおれるなどよほど外見に変化がない限り、「同じ変わらないタンポポ」であると捉えてしまいます。また、別な場所で別な「タンポポ」を見つけても、「ここにもタンポポが咲いている」として先ほど見た「タンポポ」と同じように捉え、それらの独自性や唯一性を明確に意識しません。

このように、私たちの認識は、「戯論」の活動によって「ことば」を用いたかたちでなされるため、「ことば」の特性が附加されて、現実の対象そのままではなく、変質されて捉えられています。しかも、その変質は、心が有する

「戯論(言語のシステム)」によって自動的になされてしまい、本人は気づかないばかりか、現実をそのまま正しく捉えているとさえ思っています。龍樹が指摘しようとするのも、私たちは心で対象を捉える時、気づかないうちに「戯論」というシステムを活動させて「分別」というかたちで対象を捉えており、それが最終的には「苦しみ」を生み出すということ、であると思います。

最後に、「あるがままの現実世界」と「戯論(言語のシステム)」と「分別の世界」の三つを、以上に述べてきたことを基にして、簡単な図にしてみると次のようになると思います。



右側が「あるがままの現実世界」です。その現実世界を私たちは自らの心の中に仕組まれた「戯論(言語システム)」を通して「分別の世界」に変換し、それを「事実」としてとらえて「日常の世界」を現出し、その中に生きています。

「戯論」は、ある種の「言語システム」（あるいは「ことばのフィルター」）と言ってもいいと思いますが、これをシステムという視点から少し補足しておきます。「戯論」という言語システムは、先ほど述べたように、基本的な約束事を保持しながら言語的拡張性を有しているので、パソコンなどの基本システムと似た面を持っています。基本システムはウインドウズのパソコンでは共通ですが、ユーザーはそれぞれ自分でパソコンを使用しながら、設定や入力データや辞書などを自分なりのものに拡張変化させていきます。これを「カスタマイズ」と呼んでいますが、言語システムも同じように考えることができます。各人の心にある「言語システム」はその基底の部分は約束事として各人に共通のもですが、その後の経験によって、その人なりに意味が拡張されたり、語の間の関係が作り直されたりするからです。その人なりのシステムに「カスタマイズ」されていきます。私たちの「言語システム」は経験によって絶えず拡張変化している、すなわち絶えず「カスタマイズ」されているのです。逆に言えば、経験しながら自分なりに自分として生きていくということは、自分の「言語システム」を絶えず「カスタマイズ」しているということでもあります。したがって、何らかの外的な要因によって気づかない限り、死ぬまでそのシステムは働き続けることになりませんが、それは迷いの世界からは出られないということでもあります。龍樹はこの私たちの「戯論と分別」の仕組みに気づかせようとしているのです。